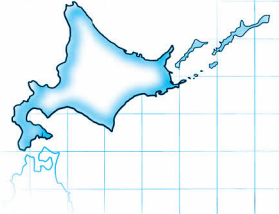




# ペリフェリ ①



## 外縁の記憶と大塚さん

日本赤十字社 常任理事 渡邊 芳樹

大塚義治さん（日本赤十字社名誉社長）が当誌に100回にわたり掲載されたコラム「休憩閑話」が昨年10月24日号をもって終了した。数年前から癌の治療が続いていた大塚さんではあったが本年1月下旬に突然の訃報に接した。残念至極である。心より御冥福をお祈りする。

厚生省入省5年先輩の大塚さんには保険局長時代、事務次官時代と二度にわたり医療・年金改革と続いた大変困難な状況でお任せし心のこもった御指導を受けた。また私が2017年日本赤十字社常任理事に選任され今日に至ったという御縁もある。

大塚さんは東京の下町生まれだが戦後幼くして移住して北関東の山村で育った。その後、都立上野高校に進学し東京大学を卒業された。私は大塚さんの1年先輩で同じ高校卒の和田勝さんから何かにつけて大塚さんを大切にす言葉聞かされて育った。

私は北海道の小さな市の生ま



れ育ち。内地にあらざる外縁の地だ。小中高校ともに近くの公立校。東京大学に進み厚生省に入省した。職場に先輩後輩は皆無だった。自分と一緒にしては誠に恐縮だが、お仕える以前より何故か片田舎育ちの親近感を抱いていた。

大塚さんの仕事ぶりは洗練され冷静沈着で思いやりに溢れ、説明資料づくりは緻密、本屋好きの読書家で文章の質も極めて高い。

私の場合は、祖父母が東京での生活破綻の末に旧仙台藩角田の縁を辿って北海道に渡った。父母の代も祖母と6人の子供を抱え生活上の苦労は大変なもの

だった。ただ、私の代でも東京都に本籍を置いたまま。東京都出身とされることも多かった。良し悪しだが先祖の贈り物である。大学紛争盛んな高校時代に父祖の地東京に関心が強まり、郷里からの生活支援も乏しいまま上京した。自分の出自と使命をどう考え行動すべきか結構思案したものだ。

スウェーデンは私を育てた第二の郷里。大使時代を含め6年余のスウェーデン勤務。その間に会った岡沢憲美早稲田大学教授は北欧政治学の権威、若き頃敢えて欧州諸帝国の外縁（Periphery・ペリフェリ）に着目し、スウェーデンを自らの学問の中心に据えた。確かに歴史上ローマ帝国に取り込まれず、その外縁でローマ法の影響も受けずに独特の国民性を育て超先進国に駆け上がった国である。

私は、常に外縁から中心を俯瞰し、国と社会保障の行く末を見極め行動しようとして心に決めてきた。大塚さんはどう御覧になっていたであろうか。